

エヴァンズの「透明性」という概念について

坂倉 涼

0. はじめに

ガレス・エヴァンズはその著書『指示の諸相』において、自己知(self-knowledge)に関する議論に際して「透明性」(transparency)という概念を提出している。本稿は、この概念を、エヴァンズの議論の一般的方向性とは「違った仕方」で理解する可能性、を考察することを目的としている。そのため、1. では「私」観念に関するエヴァンズの議論の概略を示し、2. において、ウィトゲンシュタインの論述を参照しながら、エヴァンズの方向性に対して対抗的であるような「私」観念の可能性を論じる。3. ではエヴァンズの「透明性」という概念を導入する。4. では、「透明性」という概念にとっての中心的事象「信念の自己帰属」に関して、エヴァンズの方向性と、ウィトゲンシュタインの論点を拡張して得られた方向性を提示する。5. において、「透明性」という概念の非エヴァンズ的な方向性を考察する。

1. エヴァンズの「私」観念に関する議論の概略

エヴァンズによれば、人は「私」観念('I'-idea)を持つためには、自分自身が世界内の物理的対象(その人自身であるところの)であるということを理解していなければならない。エヴァンズは、著書『指示の諸相』のある節において、次のように述べている。「この節における考察は、次のような共有された観念に対抗するものである。その観念とは、「一人称的視点」からの、われわれのわれわれ自身についての概念は、思考し、感じ、知覚する物についての概念であり、必ずしも空間内に位置づけられた物理的対象についてのものである必要はない、という観念である。」¹われわれは、自分自身を「私」という観念のもとで思考

しうするためには、自分自身が世界内の一物理的対象であることを理解していなければならない。では、この理解の詳細は、どのようなものだろうか。

このことを見るためにはまず、同定非依存的(identification-free)という概念を考察する必要がある。同定非依存的な判断とは次のようなものである。私が目の前のものを見ているとき、私は、それを見ている自分(の身体)を観察したり同定したりすることなく、目の前の景色だけを見ることで「私はこれこれを見ている」という自分に関する判断を下すことができる。そして、「私はこれこれを見ている」という命題がそのような同定非依存的な判断を反映したものであるならば、この命題に関して、次のような疑問を提出することは意味をなさない。「私はこれこれを見ている。しかし、これこれを見ているのは本当に私であろうか？」この疑問文が意味を持たないということが、同定非依存的な判断を反映した命題の特徴である。

同定非依存的、という呼称は、「同定という過程がもし存在しているなら、同定に関する誤りもまた可能である」という直感から帰結したものだと思うされる。つまり、同定に関する誤りが考えられない判断は、同定に依存していないゆえに、「同定非依存的」と呼ばれるべきだ、という直感である。同定に依存的な判断の場合、「それは本当に私であろうか？」という問いを提出することが可能であるように思われる。例えば私は鏡の前で「私の額にはこぶがある。しかし額にこぶがあるのは本当に私であろうか？」という問いを提出することが可能だろう。鏡像は、実は私のものではなく、額のこぶは、私の隣に立っている人のものであるかもしれないからである。そのような誤りが生じたのは私が隣の人を自分と「誤って同定してしまったため」だ、説明されるかもしれない。そしてこのように、そこで生じた誤りを同定の誤りとして説明できる判断が、同定「依存的」な判断と呼ばれるのである。

確かに、同定非依存的判断を反映していると思われる命題が、上述の特徴を示さないように見える事例、は存在する。例えば、触覚に基づく「自分はこれこれのものに触れている」という判断は、大抵の場合同定非依存的であろう。しかし、次のような状況を考えることができる。多くの鏡が張られている部屋で、幾つもの手が伸びており、そのうち一つが布切れに触れている。ところでその部屋にいる私は、手に布切れの感覚を感じている。そのような状況では私

は、「誰かが布に触っている。しかしそれは私だろうか？」と問うことができるだろう。

しかしエヴァンズは、このような事例は、同定非依存的だと思われた判断が実は同定依存的であったということを示しているのではなく、ただ、同定非依存的判断が獲得される正規の仕方が阻害されている逸脱事例を示しているにすぎない、と論じる。もし正規の仕方が確保されているなら、そこでは「しかしそれは本当に私であろうか？」と問うことは意味をなさないのである²。ある命題が同定非依存的判断を反映していると言えるためには、そこでは対象に関する情報が、「正規の仕方」で獲得されているということが確保されていなければならない。正規の仕方とは、われわれが普段ものを見、触れるような仕方（鏡張りの部屋の状況におけるのではないような）である。

そして、このように、主体がある対象について観念を形成することが、主体がその対象に関して知識を持つ仕方（上に「正規の仕方」と表現したような）に依存しているような判断は、同定非依存的であり、そのような判断の分類に収まるものとして、「私」「ここ」「これ」を主要素とする思想（‘I’-thought, ‘here’-thought）が挙げられる。正規の仕方では「ここは暗くて気がめいる」という判断を下すなら、われわれはまず「ここ」で指示される場所を同定し（そのような同定のために利用できるのは、その場所に関する「これこれこのような場所である」という記述だけであろう）、そののちに「ここは暗くて気がめいる」と判断するのではない。つまり、正規の仕方では情報が与えられているなら、「ここは暗くて気がめいる。しかし、暗くて気がめいるのは本当にここであろうか？」と問うことは意味をなさないのである。正規の情報獲得の仕方が阻害されているか、あるいは主体が、それが阻害されていると考えるかしない限り、「それは本当にここなのか？」「それは本当に私なのか？」といった問いは意味をなさない。

このような「同定非依存的」な判断が活躍する場が、私の身体を中心とした「自我中心的空間」である。私の身体は「ここ」に位置し、目の前のものは「これ」で指示できるような、「私」を中心として組織化された空間が、「自我中心的空間」である。この自我中心的空間における同定非依存的な判断が、エヴァンズにとっては、自分を「世界内の物理的一存在者」として理解するために決

定的に重要なものである。

エヴァンズが引くトマス・ネーゲルによれば、客観的物理世界と自我中心的世界を架橋するような何物も存在しない³。一人物トマス・ネーゲルが自分の家の焼け落ちるのを見ているという設定に、そのトマス・ネーゲルが「私自身」であるということをつけ加えるとしても、その追加によっては、世界の事実の何事も変化をきたさない、とネーゲルは論じる。変化するのは、世界の内容(what)ではなく、世界が思考される仕方(how)のみである。物理的宇宙地図というものが存在するとしたら、そこに「私」を描き込む隙間は見出されない。

このようなネーゲルの主張に、エヴァンズは反対する。エヴァンズによれば、物理的宇宙地図がそもそも地図であるためには、その地図は使用できるのでなければならない。そして、その地図を使用するためには、地図に描き込まれた対象が、知覚されるところの対象でもあるということ、主体が理解していなければならない。つまり、地図に描かれた物体が存在する世界が、主体の物理的身体が位置づけられるまさにその世界でもある、ということ、主体が理解しているのでなければ、その地図は使用されることができない。物理的宇宙地図が描く世界に主体自身が位置づけられ、主体自身が知覚する世界が物理的宇宙地図が描き出す世界であるということ、主体が理解していないなら、地図に関する理解も、主体自身に関する理解も成立しない、とエヴァンズは論じる。

このことは、自我中心的世界が客観的物理世界と相補的に成り立つ世界であるということを示している。自我中心的世界と客観的物理世界の相補性は、われわれが次のような推論のための原理を獲得しているということに示されている。「私はこれこれを知覚する。これこれは p において成り立っている。従って私は p にいる。」「私はこれこれを知覚する。私は p にいる。したがってこれこれは p において成り立っている。」「私は p にいる。これこれは p において成り立っていない。従ってこれこれのように思われても、私は実際にはこれこれを知覚できていない。」「私は一瞬前に p にいて、せいぜい p' しか移動できない。従って私はこれこれを知覚するだろうと期待してよい。」これら推論の原理を獲得しているということは、自我中心的世界と、その中心に位置する私からは完全に独立したものとしての客観的物理世界とのお互いを、関連させつつ私が理解しているということである。そしてこのことが、この節の初めに提示した、

自分自身を「空間内に位置づけられた物理的対象」として理解する、ということである。

私の自分自身についての理解に同定非依存的な要素が存在せず、まったくもって自分を「同定依存的に」理解するならば、私は十全な「私」観念を獲得し得ない。「同定依存的な」対象理解は、その対象の記述を根拠とするように思われる。しかしいかに対象を十全に記述できても、それが「自分自身である」ことがその人自身に確保されるということは保証されない。オイディプスが「ライオスの殺害者」であるとして、オイディプスが「ライオスの殺害者は自分である」と認識するという場面を考えてみよう。そのために何らかの記述、「イオカステの息子がライオスの殺害者である」「スフィンクスの謎を解いた者がライオスの殺害者である」が与えられ、その内容をオイディプスが理解したとしても、その上でもなおオイディプスは、「イオカステの息子」「スフィンクスの謎を解いた者」が「自分自身である」ことを理解していないかもしれない。また、自分自身が誰かを理解しているからといって、それが「イオカステの息子」であることや、「スフィンクスの謎を解いた者」であることを理解していないかもしれないのである。

したがって、同定非依存的な判断が「私」観念に伴っていないなければならない。そしてそのような判断が「自分自身を、空間内に位置づけられた物理的対象として理解すること」を伴うという点は、上述のとおりである。

2. 非エヴァンズ的な「私」観念の可能性

「私」観念を持つためには、人は自分自身を空間内に位置づけられた物理的対象として理解していなければならない、というのがエヴァンズの主張である。物理的対象とは、その人自身にとってだけでなく、他のあらゆる人にとっても存在する存在者である。この理解が「私」観念に組み込まれていなければならないとは、ある意味で、他者が私を理解するように私も私自身を理解していなければならない、ということである。他者が理解するところのものが、私もまた理解しているところのものである。ところで、エヴァンズはこの主張を、ウィトゲンシュタインの「私」に関する主張とは方向を異にするものと位置づけ

ている⁴。他者がその人について理解するように、その人自身も自分について理解していなければならない、というのがエヴァンズの主張であるならば、ウイトゲンシュタインの論述はそれとは異なったものである。ウイトゲンシュタインは、「私」観念において人は、他の人を理解するときに理解している事柄を自分自身に関して理解してはいない、という点を強調しているからである。その意味で、他者が理解する「私」と私自身が理解する「私」とは異なったものである。

そこで以下ではしばらく、ウイトゲンシュタインの『哲学探究』での論述を参照しつつ、他者が私について理解してはいるが、私自身は自分について理解していない事柄に焦点を当てて考察していきたい。

ウイトゲンシュタインは次のように述べている。

私は誰かある人について「彼は…と信じているように思われる」と言い、誰かある人は私について「彼は…と信じているように思われる」と言う。では、なぜ私は自分についてそのようには決して言わないのだろうか、他人は私について正當に「彼は…と信じているように思われる」と言うときにさえ。⁵

この引用では、二つの要素が言及されているように思われる。一つは、私は、私が他人について語るようには、私自身について語らない、ということであり、もう一つは、私は、他人が私について語るようには、私自身について語らない、ということである。

先に言及した自我中心的空間というもので言えば、私はこの空間の中心に位置する。この空間が私に関係する仕方と、私以外の者に関係する仕方は異なる。他者はこの空間の中心に位置する物理的対象、つまり私を、私以外の人々を眺めるのとまったく同じように、眺めるであろう。しかしこの中心に位置する私のみが、その物理的対象、つまり自分自身をそのように眺めることをしない。私はそこ「を」眺めるのではなく、そこ「から」眺めるのである。私の視線は大抵、自分の身体には注がれていない。テニスをするときには、テニスのボールを、徒競走をするときには前方のラインを見るのであって、ラケットを握っ

ている腕を、地面を蹴っている自分の足を眺めるのではない。私の視線は大抵の場合、外界に注がれているのである。

他者がこの自我中心的空間の中心(他者にとっては中心ではないが)に発見する私の身体(たとえば私はL.W.であるとしよう)は、したがって、大抵L.W.自身には与えられないものである⁶。少なくとも、L.W.の身体は、他者に与えられるような仕方ではL.W.には与えられない。

L.W.は他者の見るものなら大抵のものは自分も見ることができる。L.W.が見るN.N.の姿と、L.W.にとって他者であるP.N.が見るN.N.の姿は、ほとんど同じようなものだろう。しかし事柄がL.W.に及ぶとき、事情は違ってくる。L.W.は他者から見た自分の姿を、その他者が見るように見ることはできない。L.W.と他者は大抵同じ景色を眺め、同じものを見ることができるが、そこに一箇所暗点が記されている。それが、他者から見たL.W.の姿である。L.W.は誰が見るL.W.自身の姿も見ることができない。L.W.とP.N.がN.N.を見るようには、L.W.とP.N.はL.W.を見ることはできない。そこではつまり、P.N.は見ることができ、L.W.は見ることができない⁷。

L.W.は、自分がN.N.やP.N.を見るようには、自分を見ることができないし、N.N.やP.N.がL.W.を見るようには、L.W.を見ることができない。ウィトゲンシュタインからの先の引用を思い起こすなら、私ができないことは、以下の二点の仕方では述べられる。

- 「すべての人がL.W.の姿を見ることができる。しかし**L.W.だけ**(がそのL.W.の姿を)見ることができない。」
- 「L.W.はすべての人の姿を見ることができる。しかし**L.W.の姿だけ**は見ることができない。」

私が見ることができないのは、他者が見る私の姿である。他者と同じ景色を眺めていると思われるその視界の一箇所、暗点の部分に、私が見ることのできない私の姿、他者が見る私の姿が対応している。その姿は、原理的に私以外のすべての人が見ることのできる姿である。そして私だけが、それを見ることができない。私が見ることができないのはほかならぬ私自身の姿であり、私のみが

それを見ることができない。

私についての知識に関する、私と他者とのあいだの非対称性を述べてきた。もちろん上述のことは、「私は「私」観念を持つために自分を空間内に位置づけられた物理的対象として理解していなければならない」という要請を反駁するものではない。しかし、ウィトゲンシュタインの論述がエヴァンズのものとは異なる方向性を含み持つことは示すことができたと考える。

3. 「透明性」

エヴァンズは「透明性」という概念を以下のように導入する。

信念を自己に帰属させる際、人の目は、いわば、時には文字通り、外に向けられている——つまり世界の方に。もし誰かが私に「あなたは第三次世界大戦が起こると思うか？」と尋ねるなら、私は彼に答えるために、「第三次世界大戦は起こるだろうか？」という質問に答える際と同様、外側の世界の事象に注意を向けなければならない。私は、「自分はPと信じているか否か」という質問に答えるために、「Pであるか否か」という質問に答える際に適用する手続きを行使する立場に、身を置くのである。[……]もし判断主体がこの手続きを行使するなら、そのときには必然的に、彼は自分自身の心の一状態に関する知を得るであろう：もっとも厳格な懐疑論でさえ、ここにくさびを打ち込む隙間を見出すことはできない。⁸

あなたがPと主張する立場にいるとき、あなたはまさにその事実において(ipso facto)、「私はPと信じている」と主張する立場にいる。⁹

「透明性」という概念に関して重要な点は、人は自分の信念状態を知るためには内的自己精査(internal self-scanning)を行う必要はなく、外側の事実(外界の事実)に目を向けていればよいという点である。

また、違った原理であると述べられているものの、信念の透明性に似た特性を持つものとして、エヴァンズは知覚経験の心的自己帰属に関して論じている。

本稿に直接関わるものではないが、「透明性」という概念の明確化のためにしばらく、知覚経験の心的自己帰属に関して見てみよう。本稿に直接は関わらないというのは、本稿は主に信念に考察を限るからである。

エヴァンズの論述にしたがうと、われわれは一般に、知覚経験を主体の情報状態と見なす。知覚とは世界を知覚することであり、世界に関して判断を下すことであるから、情報状態も内容を持ち——なぜなら世界はある仕方で表象されるから——そして真偽の評定を許すものである。情報状態がこのようなものと見なされるなら、それは行動と適切な関係を取り結んでいなければならない。情報状態は、主体の行動に動機的な力を及ぼす。情報状態は、原始的な生物においては運動システムにすぐさま結びつく。この行動との結びつきが、情報状態が内容を持ち、真偽の評定を受けることを可能にしているのである。しかし、概念行使や推論の能力を持つ主体においては、この状態の動機的な力はすぐさま行動を引き起こすのではなく、情報状態はいったん概念行使や推論のシステムの入力として取り扱われ、そしてこの入力に基づいて、主体は世界に関する判断を形成することになる。

情報状態は非概念的であるが、情報状態に基づいた判断は概念的なものである。しかし誤ってはいけない点は、判断は非概念的な情報状態に基づいて形成されるが、その判断は情報状態についてのものではなく、世界についてのものである点である。主体は判断の形成、あるいは概念化の過程において、非概念的内容を持つ情報状態から、それとは別の情報状態、概念的な内容を持つ認知的状態(cognitive states)へと移行する。その際、判断の内容が正しいと確信するためには、主体の眼は(自分の内的状態の方をではなく、)「世界の方を」向いていなければならない。

そして主体が自分の情報状態に関する知を得るためには、彼が世界について判断した際に用いた概念化の技能を再利用すればよい。自分の現在の情報状態について知を得るためには、「今ここにおいて事態はいかなるものであるか」について判断しようとする際に用いるのと正確に同じ手続きを踏めばよいのである。しかしその際、無関係な(extraneous)情報についての彼の知識は除外されなければならない。例えば錯覚において、「棒は水に入れると曲がって見える」という情報は除外し、まさに錯覚されている事態が実際の事態である「かのよう

なふりをして、その際には」その世界はどのように判断されるかを決定すべく努めなければならない。その際、その情報状態についての知は、「私にはあたかも…であるかのように思われる」という句を添えて、「私にはあたかも、棒が曲がっているように思われる」という仕方でも表現されるだろう。しかしこのときでも、情報状態は主体の対象となっているわけではない。主体は情報状態にいる(in)というだけである。世界の状態にとって内的状態があるような仕方では、内的状態にとってあるような情報状態なるものは存在しないのである¹⁰。

信念の自己帰属と知覚経験の自己帰属は、違った原理に基づいてはいるが、両者ともその自己帰属の際に、「自分の心を覗きこむ」必要はなく、「外側の事実眼を向けて」いればよい。これが「透明性」という概念である。

4. 信念帰属におけるエヴァンズの見解とそれとは別のもう一つの見解

「透明性」という概念を見てきた。その中心的主題は信念と知覚経験である。「透明性」という概念の非エヴァンズ的な理解の可能性を考察する前に、以下、信念帰属に関して、エヴァンズとウィトゲンシュタインの論述を対比することを試みる。

ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

「私が「私は痛みを持っている」と言うとき、私は、その痛みを持っているある人物を指示しているのではない。なぜなら私はある意味で、誰がその痛みを持っているのかをまったく知らないのであるから。」そしてこのことは正当化できる。というのも、何よりもまず、私は確かに、これこれの人物が痛みを持つと言ったのではなく、むしろ「私は…」と言ったのであるから。つまり、そのことによって私は、誰を名指したわけでもないのがある。それはちょうど、私が痛みに呻くことによって誰を名指すのでもないのと同じである。たとえ他の人はその呻きから誰が痛みを持っているのかを知るとしても、である。

誰かが痛みを持っていることを知る、ということは何を意味するのか？それは例えば、この部屋の——そこに座っている人、あの隅に立っている

人、あるいはあそこにいる金髪の背の高い人、などなどのうちの——どの人が痛みを持っているかを知ること、を意味する。——私はここで何を言いたいのか？ 人の「同一性」には非常に様々な規準が存在するというのである。

「私は」痛みを持っていると言うことを、これらの規準のうちのどれが確定するのか？ どれでもないのである。¹¹

この箇所から、さらに次のようなことを考えてもよいだろう。呻いている人は、誰が呻いているかということの知を持たず、ともかくも呻いている。そしてその人は、自分が呻くと周りの人がある特定の人物(その呻いている人自身)を必ず助けに来ることを観察する。この観察を呻きと結びつけて、呻きがある物理的な特定の人物(自分自身)を指示するということを学び覚えるのである。その場合でも、呻きを発したのはそのような学習の前なのだから、呻くためにそのような学習が必要であるということにはならない。

この呻きの例で示されたことを「私」発話にも適用するなら、次のようになる。「私は家が火事だと信じている」と言えるためには「家が火事だ！」とも言えなければならないと思われる。そして「家が火事だ！」と発話するためには、人物の同定は必要とされない。少なくとも、「家が火事だ！」という発話の主語は人ではないし、したがってこの発話の発話者自身でもない。そこで、「私は家が火事だと信じている」と発話するために要求されるものが「家が火事だ！」と発話するために要求されるものと同じであり、それ以上のものではないとしたら、「家が火事だ！」において「私」で指示される人物の同定が必要とされないのと同様、「私は家が火事だと信じている」においても、語「私」がある人物の指示表現の機能を持つということが要求されることはない。「私」は人物を指示する語である必要がないのである。

そして呻きと同じである点¹²は、「私は家が火事だと信じている」という発話をした主体自身は誰がその発話をなしたかを知っている必要はない(語「私」の指示対象の理解は必要とされない)が、周りの人はその発話を聞くことで、誰がその発話をなしたかを知ることができる、という点である。そして結果として発話者は、周りの人が彼について持つ理解を自分の「私」観念の理解に組み

入れることができる。

上記のような「呻き」「私」発話の事例では、いわば「私」観念を持つための必要要件、それがなければ私観念がそもそも生じ得ないものとして、語「私」がある物理的な特定人物を指示することの理解がなければならない」ということは主張されていない。しかし結果として出てくる事態は、エヴァンズの扱った状況(主体は、語「私」で物理的な特定人物が指示されていることを理解しているという状況)そのままである。

では、次のように言えるだろうか。「ウィトゲンシュタインの引用から展開した状況は、エヴァンズが説明しようとした事柄、つまり「私」の指示対象が物理的な特定人物であるということ、と整合的である。しかしエヴァンズがしたような仕方でそのことを説明するのではない。つまり、ウィトゲンシュタインの引用からの拡張は、「私」観念を持つための必要条件として「自分を物理的な特定の人物であると知っていること」が要請されるという点を、主張しはしないのである。」つまり、自己を物理的な特定の人物であると理解することは、「私」観念を持つことに対して内在的、構成的な要件とはならない、というのがウィトゲンシュタインの見解を拡張した上記の状況で意味されたことである。

しかしわれわれは1.で、自己を物理的な特定人物として理解するとはいかなることであるかを辿ってきた。それは、自我中心的空間の概念と不可分であった。「私」は「ここ」などと同列の身分を占めた概念であり、そして自我中心的空間の「ここ」に存在するのが特定の物理的対象(自分自身)であるということが、そこでは非常に重要なことであった。「私」観念を持つ際には自分が物理的な特定の人物であると理解されていなければならない」ということは、自我中心的空間と「私」「ここ」「これ」といった観念との体系的関連を根拠に主張されたのである。したがって、「他者が理解するように自分自身を理解していなければならない」という要請が「私」観念を持つために「内在的に」要求されるものなのか、それとも、内在的には要求されないが、ウィトゲンシュタインからの引用に続けて上に述べたように、「(周りの人が助けに来る人物)として」結果的に「私」観念は物理的な特定人物と対応するのか、という区別は、エヴァンズの議論に内在しては取り出すことのできない区別である。エヴァンズの議論では今述べた意味で「対応」「非対応」について語ることは意味をなさない

だろうからである。だが、そのことによってこの区別が直ちに無用になるというわけではない。

5. 「透明性」という概念の新たな方向性

ウィトゲンシュタインは次のように述べる。

「結局のところ、私が「私は…と信じている」と言うとき、私は自分自身の心の状態を記述しているのである。——しかしこの記述は、間接的に、信じられているところの事実についての主張なのである。」——ある状況で私は、写真に写っている事柄を記述するためにその写真を記述するように、である。

しかしそのときには、私はまた写真がよいものであるとも言うことができるのでなければならない。「私は雨が降っていると信じている。そして私の信念は信頼できる。したがって私はそれを信頼しよう。」——このような場合、私の信念は一種の感覚印象であろう。¹³

ウィトゲンシュタインはこの引用箇所のおそらくすぐあとで、感覚に不信を抱くことはあるが、信念に不信を抱くことはない、と述べている。したがって、「自分の」信念を信頼するか否かということは問題になりえないのだ、と論じている。「自分の」と強調したのは、「他者の」信念は明らかに私にたいして世界の写真のような相を提示するからである。われわれは、他者について、その他者と関連する世界の事実を知ること、その他者が何を信じているかを知ることができる。つまり、実際の情景から写真に何が写っているかを推論することができる。そしてまた、その他者の信念を知ること、自分が直接には知らなかった世界の事実をそこから推論することができる。写真を見ることで、実際の情景を直接見ることはせずとも、その情景がどのようなものであるか推論することができる。世界の事実から他者の信念を推論し、他者の信念から世界の事実を推論することができる。この点で、他者の信念は私にとって、世界の事実を適切に写し取るか、まずく写し取るかしている写真である。私は、他者の信念を信頼し

て世界の事実についてそこから推論するか、それとも信頼せず、その信念を偽と評定するかである。写真には写りの良し悪しがある。

しかしこの同じ推論関係を、自分と世界の事実とに関しては持つことはできない。「透明性」が明らかにしようとしていたのは、このような推論関係によらない、主体の信念の自己帰属の場面である。

だが、エヴァンズの「私」観念を持つためには、人は自分を「空間内に位置づけられた物理的対象」として理解していなければならない」という要請は、自分の信念をある種の写真として捉えることにつながるのではないか。エヴァンズの言うように、透明性とは「内的自己精査(internal self-scanning)を行わず、外側の事実(外界の事実)に目を向けることで、自分に信念を帰属させる」ことかもしれないが、そのときの「外側の事実」とは、エヴァンズにとって、世界についての写真に過ぎないのではないか。それに従えば、主体が捉える自分の信念は、他人にとってと同じように主体自身にとっても、「空間内の一物理的対象」の属性である。そしてエヴァンズによれば、主体は、自分の信念が空間内の一物理的対象の主観的な一属性であるとわきまえている限りでしか、「私」観念を持ち得ない、と言われているように思われる。しかし上記のウィトゲンシュタインからの引用が示しているのは、信念の文法の一人称的な特有性は、他人の信念は写真と見なせるが、自分の信念は、写真の情景を眺めるようにその人自身によって眺められることはできない、という点であるように思われる。一人称において主体は写真に写った世界ではなく、世界を「直接」眺めているのではないか。

だが、エヴァンズの主張もまた的を射たものであるように思われる。私はある特殊な状況においては、自分の信念を疑ったり、それを取り立てて信頼したりすることがあるのではないか。むしろそのようなことができなければ信念を持っているということが言えない、ということは、エヴァンズの主張であり、そして一般にきわめて妥当な見解であると思われる。

このきわめて妥当な見解が「透明性」といかなる関係にあるのか、は決して明らかでない。ウィトゲンシュタインの見解としては、「透明性」において人は「直接世界を」見ている。これは自分の信念を写真として見るという方向性とは異なる方向性のように思われる。一方エヴァンズはある意味で、「自

分の信念も写真として捉えることができなければ「私」観念を持つことができず、したがって信念を持ったり自分の信念を表明したりという実践が不可能になると主張しているように思われる。

6. 結論

エヴァンズの取り上げた「透明性」という概念は、エヴァンズの「私」観念を持つ者は、「まさにその観念を持つために」、他者がまさにその人について理解するような仕方、その人自身も自分を理解していなければならない」という要請を組み込んだものと考えられる。一方ウィトゲンシュタインによるならば、「透明性」において、自己の信念はまったく写真のようなものではなく、人は「直接世界を(写真を介さず)」見ている。そこでは、他者がまさにその人について理解するような仕方、自分を理解することが、「透明性」の要件のもと自己の信念と関わる際に内在的な要件としては必要とされていない。ここでは、「透明性」という概念に関して異なった二つの方向の見解が存在するように思われる。いずれが正しいのか、それとも調停する第三の道があるのか、本稿は、二つの方向性の区別をしたところでひとまず終えることにする。

註

¹ Evans, G., [1982], p. 224.

² 逸脱事例として、私の足の神経が他人の足につながれている状況で、足を見ることなく「私の足が曲げられている」と判断する、といったものも考えられる。ここにおいて、「私は足を曲げている。しかし足を曲げているのは本当に私だろうか?」と問うことは有意味に思われる。エヴァンズによれば、この事例は、「私は足を曲げている」という通常の判断が同定非依存的ではない、ということを示しているのではない。エヴァンズによれば、通常の状況で「私は足を曲げている」という判断を、曲げられた足を観察したりなどせず下すときには、やはりそれは同定非依存的な判断であるのであって、逸脱事例は、そのような通常の、正規の状況設定が阻害されていることを示すに過ぎないのである。

ちなみに、エヴァンズ自身は「正規の仕方」というような、対象に関する情報経路の特性について実質的な何かを主張するようには見える表記を避けている。その代わりに「逸脱的でないような仕方」という言い方をしている。しかし、エヴァンズの議論の概略を示すことを目的とした現下の文脈では、「正規の仕方」という表記はそれほどミスリーディングではないと筆者は考えたため、ここではこの表記を用いる。

- ³ Nagel, T., [1970], p. 103.
- ⁴ Evans, G., [1982], p. 209 注参照。
- ⁵ Wittgenstein, L., [1953], p. 163. なお、以下ウイトゲンシュタインからの訳出に際して黒崎, [1997]を参考にしたが、引用箇所は私訳による。
- ⁶ したがって、そのことに私はほとんど気付けないが、他者からすればまったく容易に見て取れるような自己欺瞞に、私が陥ることが可能なのである。
- ⁷ 一人称的な特異性が自分に関して、他者に関してとは異なった固有な帰結を持つ事柄のうち、本稿では主に、理解不可能性に焦点を当てる。
- ⁸ Evans, G., [1982], p. 225.
- ⁹ *ibid.*, p. 225.
- ¹⁰ 以上、知覚経験の情報状態に関する論述は、Evans, G., [1982], pp. 225–228.
- ¹¹ Wittgenstein, L., [1953], p. 104, §404. なお §405, 406 も参照のこと。
- ¹² 「呻き」と「家が火事だ!」という発話には類似点以上の明らかな相違(片方は意味内容を持たず、片方は持つ、という意味論的特性の相違など)があるので、両者の類似点を主張するのは無理があるように思われる。しかしそれらを発する際に、発する主体の自分自身についての理解は必要ない、ということにおいてだけ両者は類似しているという点を、本稿では特に取り出している。
- ¹³ Wittgenstein, L., [1953], p. 162.

参考文献

- Evans, G., 1982, *Varieties of Reference*, New York: Oxford University Press.
- Grush, R., “Guide to Gareth Evans’ *The Varieties of Reference*”, <http://mind.ucsd.edu/misc/resources/evans/evansindex.html>.
- Nagel, T., 1970, *The Possibility of Altruism*, Oxford: Clarendon Press.
- Shoemaker, S., 1994, “Self-Reference and Self-Awareness”, in Q. Cassam ed., *Self-Knowledge*, New York: Oxford University Press.
- Wittgenstein, L., 1953, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, Oxford: Blackwell. [『哲学探究』読解, 黒崎宏訳, 産業図書, 1997年.]

(さかくら りょう／千葉大学)